

仙波恒雄監訳・解説「アメリカの精神医療」

精神医療転換への他山の石

道下 忠蔵

日米の医療のあり方の違い

精神医療のあり方をめぐって入院中心から外来、地域医療への転換が論ぜられ、熊本県で我が国初の「精神衛生社会生活適応施設」の建設が進むなかで本書が発刊された。冒頭の解説にあるように、この本は、監訳者仙波が54年9月日本精神病院協会の米国精神医療調査団の一員として訪米し、アメリカ各地の精神医療施設を視察して来た際入手した資料のうち、アメリカの精神医療の現状を概観するのに適当と思われるものを選んでまとめたものである。

仙波については改めて紹介するまでもないと思うが、精神医療の改革、特に病院医療から地域医療への展開に、民間精神病院の立場から精力的に取り組んでいる精神医療界のホープである。彼は昭和45年千葉病院長に就任以来、人間尊重、病院の開放、社会復帰そして地域医療など、現在の精神医療が当面している難しい課題に勇敢に挑戦し、その成果をまず50年発刊の『精神病院・その医療の現状と限界』（星和書店）に集約している。その後も千葉病院を舞台として、特に慢性患者の社会復帰についての現場でのいろいろの実践を試みつつ、精神医学界にその経験や考え方を発表し関係者の注目を集めている。

彼の考え方は本書の冒頭の「訳者序にかえて」に如実に現れている。16頁に及ぶ序文は長過ぎるようにも思えるが、本書の成り立ちと監訳者の考え方からするとともにともであり、その内容は我が国精神医療の問

題点の指摘から始まって、本書の解説、日米の医療のあり方の相違点について詳しく、かつ懇切に説明されており、忙しい向きにはこの序文で本書のアウトラインがつかめるくらいである。

アメリカの精神医療はどう変わったか

さて本文は、アメリカの精神科医300人で構成されたGAP (The Group for the Advancement of Psychiatry) という学術団体の精神医療に関する報告書(1978, GAP機関誌に掲載)の翻訳である。内容は第1章緒論、第2章歴史的背景、第3章現況、第4章問題点と方向、第5章勧告の5章から成っている。

第1章緒論では、GAPの目的と構成から始まりアメリカにおける慢性精神病患者処遇の変遷とこれをなさせた要因が述べられている。

第2章歴史的背景では、アメリカの精神医療における19世紀の改革、それは州立病院の建設、入院医療への動きであり、20世紀の改革、こんどは脱入院、地域医療に向かう動きが述べられている。

第3章現況では、激しい脱入院運動の現状が多面的に述べられている。すなわち脱入院により起こっている在院日数の著しい短縮、州立精神病院入院患者の激減がまず語られ、退院患者はどこへ行くか、退院患者にどんなことが起こるか、結果を左右する種々の因子について分析され、過去と比較し、脱入院の現況が100年前の状況と驚くほど類似点が多いことを指摘している。

第4章は問題点と方向の検討で、理念と教育、科学と技術、政治と経済について述べられている。

第5章は以上のまとめで、精神病患者の現代の治療の主目標である患者を地域に帰し、ふつうの生活ができるようにするための条件が述べられ、アメリカの精神衛生改善のためしなければならないこととして、地域医療と長期患者のリハビリテーションが挙げられ、特別勧告がまとめられている。

監訳者が述べているように、これはアメリカの精神医療の転換ぶりを概観するのに格好のリポートであると思われる。数多くの資料のなかからこのリポートを選んだ仙波の問題意識の確かさとけい眼に改めて敬意を表したい。

本書にはなお付録として1978年2月に提出されたThe President's Commission on Mental Healthの報告書の総論「アメリカの精神衛生」及び精神病院の患者の動向や種々の施設についての統計資料や解説も付けられている。

本書を精読すれば、アメリカの精神医療の転換の概況がアメリカの専門家によって卒直に分析されているので、ストレートにかつ極めてリアルに把握できるように思われる。我が国においても同様の課題が関係者の間で盛んに論じられ、各地で様々な試みも行われている状況の中で、本書は他山の石としてまことに時宜を得た参考書であろう。

なお最近日本精神病院協会で調査団の視察報告「米国精神医療視察報告—その社会的側面について」がまとめられたとのことである。本書の内容を更に補い、肉付けするものとして併せて一読をおすすめしたい。

(石川県立高松病院院長)

仙波恒雄監訳・解説、高橋光彦訳「アメリカの精神医療」2,400円、A5判153頁
星和書店 1980年5月27日発行